

編集後記

数年前、台湾に住むひとりのご老人から以下のような手紙がきた。

私は中国福州市の人です。今から六十余年前、十八歳の頃、早稲田大学発行の「文学講義録」をまじめに勉強した事があります。惜しいことに、一九三七年からの戦争の為、大事に保蔵した講義録も紛失してしまいました。今、私の家族は台湾の台北市に引越して、自分の年はすでに八十五ですけれども、何時もあの懐かしい講義録をふたたび書斎蔵書にしてほしいと切に念願しております。半世紀以前の事ですが、例の講義録はきつと引続いて発行しているに違いない。御手数ながら上記「早稲田大学文学講義録」を一揃郵送して下さいませんか？ その書物の定価と送料（ドルに換算）を知らして下さい、早速が替で送金するから、謹しんでお願い申し上げます。では皆々様の御健勝と御幸福を祈って居ります。

早稲田大学御中

少しあやしい部分もあるが、りっぱな日本語文である。筆者はこれを読み、戦前の「早稲田講義録」というものの持っていた影響力に驚嘆の念をおぼえた。返事をかき、「講義録」はいまは発行されていないことを伝え、その代わりになればと一九九一年に実施した展覧会「早稲田と文学の一世紀」の図録を送った。ご老人からは折り返し、ひどく感激した文面の礼状が来て、ご自身の翻訳になる「日本近代小説選」という中国語の本が贈られてきた。そして、古くてもいから昔の講義録が

ほしい、とつたえてきた。

中央図書館地下三階に積み上げられた重複の寄贈・移管図書の中のなかから、古い「講義録」を取り分けておくよう担当者に指示しておいたところ、なかなか揃わなかったが、今年に入ってからいえず送つてみたところ、つぎのような返事がきた。

早稲田大学図書館の皆々様へ：

大地回春、鳥語花香の時節、謹んで皆様の御多幸多福をお祈り申し上げます。

皆様からお送り下さいました「早稲田大学文学講義」四六冊、確かに受取りました。ありがとうございました。一九一六年生れの私がこの講義教本を六十七年ぶり、再び目の前に開巻出来ること、そのうえ、只今大学及び研究所在學中の孫達に苦学精神を激励するにもなれること、実に我が早稲田大学のおめぐみと感謝して居ります。

では、皆様ますますのご健勝をお祈り申し上げます。

「大地回春、鳥語花香」とは、まことに希望にみちた言葉である。戦前、若いころ講義録を読んでいたというだけで「我が早稲田大学」という意識になるとはすこい。やはり早稲田大学というのは、大きな存在なのではないか。いまはどういふまひとつだが、「積善の家に余慶あり」で、よき伝統をつちかつてきた大学の先人たちの遺産を、私たちは日々食いつぶしてしまっているのではないだろうか。六十年後、台湾でもイタリヤでもドイツでもどこでもいいが、六十年前の早稲田大学をこうして懐かしんで、六十年前の人が存在できるような仕事を、早稲田大学は総体として成し遂

げているといえるであろうか。はなはだ心もとないといわねばならぬ。

二〇〇三年二月末、一九九四年から九八年にかけて、当図書館副館長をつとめられた酒井農史法学部教授が亡くなられた。資料の収集・選定を担当され、資料購入の可否につき明快な決断を下された。ご冥福をお祈りしたい。

また当紀要四八号（二〇〇一年）に掲載した『動坂界限の作家たち』でインタビューさせていただいた大槻岐美さんが、二〇〇三年春、満一〇〇歳を目前に長逝された。夫君大槻憲二氏の蔵書は当図書館に寄贈されている。本年も、さまざまな方々から貴重な資料をご寄贈いただいた。早稲田大学図書館の社会的役割をあらためて認識せざるをえない。今後とも当紀要をよろしく願います。

（記・松下）

早稲田大学図書館紀要編集委員会

松下真也（資料管理課長）

久保尾俊郎（資料管理課特別資料室）

渡邊朝子（資料管理課特別資料室）

渡邊孝之（資料管理課）

早稲田大学図書館紀要 第51号

二〇〇四年三月十五日 発行

編集 早稲田大学図書館紀要

編集委員会

発行人 旭 英樹

印刷所（株）早稲田大学事業部

発行所 早稲田大学図書館

東京都新宿区西早稲田一ノ六〇一

〇三（三三〇三）四一四一